

恋と愛

— J-POP の認知メタファー分析 —

中尾愛美・鍋島弘治朗

第1節 序論

わがままでも勝手でもね 今君に逢いたいよ 私 恋に落ちていく途中
(Way to love ~最後の恋~ feat. 唐沢美帆 / SoulJa)

愛は永遠です 君ははくの勇気です (50年後も / KAN)

愛と恋はどのように違うのだろうか。「恋に落ちる」ことはあっても、「愛に落ちる」ことはない。「永遠の愛」という言葉は存在しても、「永遠の恋」は成句として疑問符がつく。本論文では、恋と愛の違いを J-POP のデータを対象に、認知メタファー理論の分析手法を援用して論じる。序論である本節では 1.1 で論旨と目的を、1.2 で、第2節以降の展開を概説する。

1.1 はじめに

本論文では、認知言語学のメタファー理論（以下、認知メタファー理論、Lakoff and Johnson 1980, 1999; Lakoff and Turner 1989; Lakoff 1987, 1990, 1993, Grady 1997, Kövecses 2002, 鍋島 2011）の立場から J-POP における恋と愛の表現を分析し、両者の差異を明確にすることを目的とする。まず恋と愛を「期間」「速度」「方向性」の三つの項目に分類し、それぞれが以下の特徴を持つことを論証する。期間に関しては「恋は即時的」「愛は永遠」、速度に関しては「疾走する恋」「一歩一歩の愛」、方向性に関しては「一方的な恋」「双方向の愛」である。

1.2 各節の構成

次の第2節では先行研究を取り扱う。2.1 で Lakoff and Johnson (1980) の研究から恋愛のメタファーに関してまとめる。2.2 で、精神医で心理学者であるフランクルの論を展開した雨宮 (2008) から恋と愛の違いに関する分析を紹介する。最後に 2.3 で J-POP の変遷から恋愛を取り扱った難波江 (2004) の考察を紹介する。

第3節では、歌詞検索エンジン「歌詞ナビ」¹を利用して集めた歌詞データを、期間、速度、方向性の観点から取り上げ、それぞれ 3.1, 3.2, 3.3 に紹介し、恋と愛の違いを論じる。また 3.4 では大学生 30 人を対象に取ったアンケートの結果から得た、恋と愛それぞれに関するイメージをデータとして紹介する。

続いて第4節では、第2節で見た先行研究の内容と第3節で取り扱ったデータを元に分析を行う。4.1 で J-POP から見た恋の特徴と愛の特徴をまとめる。4.2 ではこれらの J-POP 表現が認知メタファー理論の観点からはどのように再分析されるか紹介する。4.3 では雨宮 (2008) とこれらの J-POP 表現の整合性について論じる。4.3 では、認知メタファー理論と雨宮 (2008) が第3節で論じた期間、速度、方向性の違いをどのように説明するか比較検討する。最後に第5節では、上に挙げた節のまとめとして、J-POP の歌詞における恋と愛の違いに関する結論を述べ、今後の展望を論述する。

¹ <http://kashinavi.com/> (最終検索日: 2010年10月10日)

第2節 先行研究

本節では哲学、認知心理学など多分野の参考文献を用いて、恋と愛の違いに関わる研究について概観する。まず、2.1でLakoff and Johnson (1980)のメタファー理論を概説し、既に記述されている恋愛メタファーを紹介する。次に、2.2で心理学的視点から恋と愛の違いを分析した雨宮(2008)を紹介する。最後に2.3ではJ-POPの流行から見る恋愛感覚を分析した難波江(2004)の主張を元に、現代の恋愛に対する感覚について取り扱う。

2.1 Lakoff and Johnson (1980)

認知メタファー理論の詳細は、鍋島(2011)に詳しいが、その端緒であるLakoff and Johnson (1980)は恋愛に関して6つのメタファーを挙げている²。

- (1) LOVE IS A JOURNEY (恋愛は旅である)
- (2) LOVE IS A PHYSICAL FORCE (ELECTROMAGNETIC, GRAVITATIONAL...etc)
(恋は物理的力(磁力・引力)である)
- (3) LOVE IS A PATIENT (恋愛は病人である)
- (4) LOVE IS MADNESS (恋は狂気である)
- (5) LOVE IS MAGIC (恋は魔法である)
- (6) LOVE IS WAR (恋は戦争である)

以下にLakoff and Johnson (1980)の挙げる例文を取り扱い、その特徴をまとめる。まず〈恋愛は旅〉メタファーを見る。(1a)～(1e)の文では、人生を道と捉え、道のり、交差点、戻る、などの用語で表現されている。なお、(1e)は電車による移動である。

- (1) LOVE IS A JOURNEY (恋愛は旅である)
 - a. Look how far we've come.
 - b. We're at a crossroads.
 - c. We'll just have to go our separate ways.
 - d. We can't turn back now.
 - e. We've gotten off the track.

(2)は〈恋は物理的力〉メタファーの用例である。火花が散るなどの瞬間的な表現や、引力で引っ張られるなどの下に向かうなど、力に関する用語が恋愛関係に使用されることがわかる。

- (2) LOVE IS A PHYSICAL FORCE (ELECTROMAGNETIC, GRAVITATIONAL...etc)
(恋は物理的力(磁力・引力)である)
 - a. I could feel the electricity between us.
 - b. There were sparks.
 - c. I was magnetically drawn to her.
 - d. They are uncontrollably attracted to each other.
 - e. There is incredible energy in their relationship.

² 日本語での「恋」や「愛」は英語にすれば全て LOVE に当たるため、上記の英文自体からの恋と愛は区別しづらい。上の括弧内の日本語は全て同著の1986年に出版された翻訳『レトリックと人生』の訳文と表記である。

〈恋愛は病人〉メタファーでは、恋愛中の対象との関係性、もしくは結婚の状態における表現に用いられている。(3)をご覧いただきたい。関係が良好であれば健康として、良くなければ不健康つまり病んだ状態であるとされる。

- (3) LOVE IS A PATIENT (恋愛は病人である)
- a. This is a sick relationship.
 - b. They have a strong healthy marriage.
 - c. The marriage is dead — it can't be revived.
 - d. Their relationship is in really good shape.

〈恋は狂気〉メタファーでは、(4)に見るように恋愛が狂気に喩えられている。自分では制御できないさまが *crazy* や *mad, wild* という表現からも読み取れる。

- (4) LOVE IS MADNESS (恋は狂気である)
- a. I'm crazy about her.
 - b. She drives me out of my mind.
 - c. He's gone mad over her.
 - d. I'm just wild about Harry.

〈恋は魔法〉メタファーでも恋愛の感情が自分ではコントロールできない様子が「呪文」「魔法」「催眠」「恍惚」などの用語で描かれている。先の〈恋は狂気〉メタファーと異なる部分は、制御できないことを前者が否定的に捉えていることに対して、後者は(5)に見るように肯定的であることが多く、夢見がちな状態と考えられていることが挙げられる。

- (5) LOVE IS MAGIC (恋は魔法である)
- a. She cast her spell over me.
 - b. The magic is gone.
 - c. I was spellbound.
 - d. She had me hypnotized.
 - e. He has me in a trance.

最後に(6)に〈恋は戦争〉メタファーの用例を挙げる。対象を獲得する上で、様々な障害を乗り越える要素が表現されている。「征服」「戦う」「勝ち負け」などの用語が使用される。

- (6) LOVE IS WAR (恋は戦争である)
- a. He is known for his many rapid conquests.
 - b. She fought for him, but his mistress won out.
 - c. She pursued him relentlessly.
 - d. He won her hand in marriage.

以上、Lakoff and Johnson (1980) に挙げられた恋愛メタファーとして、〈恋愛は旅〉、〈恋は物理的力〉、〈恋愛は病人〉、〈恋は狂気〉、〈恋は魔法〉、〈恋は戦争〉を見た。次項では、雨宮による恋と愛の相違に関する考察を紹介する。

2.2 雨宮（2008）による恋と愛の比較

オーストリアの精神科医・心理学者であった V. E. フランクル（Frankl 1959, 1988）の研究者である雨宮は、フランクルの呈する人生の意味に関するコペルニクスの転回を基盤に、恋と愛における「自己—他者関係」を論じている（雨宮 2008）。この論説によれば、恋と愛それぞれの自己の特徴は、恋の場合には「自己中心性」（2008：23）にあるのに対し、愛の場合には「自己超越性」（2008：23）にあると規定される。この自己の特徴に対する考えを元に、雨宮（2008）の呈示する恋と愛について紹介する。2.2.1 で恋に関する見解を、2.2.2 で愛に関する見解を見て、2.2.3 でまとめる。

2.2.1 雨宮（2008）による恋の分析

雨宮（2008）によれば、人は恋をすると相手のことを常に考えている状態に陥る。通常は「自己は他者との間に一定の距離を保ちながら生活している」（雨宮 2008：24）のだが、恋をすると、惹かれる要因は何であれ（雨宮はホルモンの作用などを挙げているが）、相手との間にある距離を縮めたいという願望が芽生え、「尋常ならざる対象への関心の集中」（雨宮 2008：24）が生まれるのだと述べている。しかし、雨宮（2008：24）はこの状態は尋常ではないため、「一過性の状態である」とも述べており、恋の本質はその不安定さにあるとしている。次に、雨宮（2008：25）は恋を人間の欲求実現という別の側面から見ており、それによると人間は根本的に二つの性質を持っているという。ひとつは「他者を押しつけてでも自らの内から湧き出す欲望を遂げようとする性質」であり、もうひとつは「他者との関係において他者からの肯定を欲する性質」である。本来この二つは同時には存在し得ないのだが、恋する人間の場合は「自己の欲望の充足をあきらめることなく、他者からの肯定を求めて接近する」（雨宮 2008：26）のである。つまり要約すると、恋をすると自分を好きになって欲しいという欲求を持ったまま、相手に自身を受け入れてもらおうと近づくため、矛盾となる。

しかし、この「自己中心的な欲望を抱えたまま、相手に接近する」（雨宮 2008：26）という状態は、恋をしている初期の段階にしか見られないと雨宮は言う。時間が経てば、お互いに自己中心的な欲望の主体であるそれぞれは、自身の欲求を実現することに集中し始め、互いに衝突してしまう。恋においては「互いへの関心の集中が高まっていく過程」（雨宮 2008：27）にこそ醍醐味を感じるものであり、冷めて高揚感を失ってしまうと、それは恋に対する魅力がたちまち消滅してしまうのである。また雨宮（2008：27）は、恋には「外的障害」が必要不可欠であることを、「ロミオとジュリエット」と「ドン・ファン」を例に挙げて説明している。この外的障害の存在というのは、「ロミオとジュリエット」の場合は両家の対立であるし、「ドン・ファン」の場合には女性を口説き落とす過程なのである。両者も障害を乗り越えようとするうちは関心が集中し、前者では思いの高まり、後者では相手に受け入れられる高揚感が生まれる。つまり、障害という刺激が恋の醍醐味である「互いへの関心の集中が高まっていく過程」（雨宮 2008：27）を生むのだと論じているのだ。

それでは本来の初期段階を越え、かつ上記の二者の例のような変遷もなく、自己と対象が欲望の主体として接近し続けた場合はどうなるのか。これについて雨宮は「不一致に焦燥を募らす、恋する人間は、相手を支配することによって、あるいは相手に従属することによって、一体化を謀ろうと目論む」のだと言う（雨宮 2008：28）。つまり、支配または従属することで、支配する側は従属する相手が自己の欲望に従うことで自己肯定を感じ、従属する側は自己の欲望を完全に捨て、相手に寄り添うことで支配する側から必要とされている実感に自己肯定感を得ているのだ。しかし、この一体化には二つの問題点があり、それらを彼は「一体化による自己肯定の原理的な不可能性」と「代替可能的」（雨宮 2008：29）と表現している。まず、「一体化による自己肯定の原理的な不可能性」に関して雨宮（2008）は、支配と従属の根本は他者または自己を抹消するこ

とにあり、「相手に自分を認めてもらいたい」という恋する人間の欲求を満たすには矛盾しているため、この関係性は成り立たないと主張している。以下に雨宮（2008）の言葉を引用する。

支配―従属という一体化の方向性を徹底すると、支配する者にとって、その行き着く先は他者の抹消となり、彼は誰も支配することができなくなる。従属する者にとっては自己の抹消となり、彼は誰にも従属できなくなる。彼らは、自己存在の肯定を獲得するために、支配―従属の関係を作り上げたはずであったのに、まさにその関係の帰結として、支配する者にとっては自己を肯定してくれるはずの他者が存在せず、従属する者にとっては、肯定されるべき自己が存在しないことになってしまうという、逆説が生じるのである。

（雨宮 2008：29）

次に、一体化における「代理可能的」という主張について考える。「恋する人間は、自己の立場を中心に相手との関係を構築する」（雨宮 2008：29）ため、結局のところ、支配する側もされる側も求めているのは「自己の欲望を満足させること、そして自己の存在が承認されること」（雨宮 2008：30）であり、恋する対象はこれを達成するための手段に過ぎないと、雨宮は次のような表現で主張する。

われわれが他者との関係において欲するのは、「他の誰でもないこの私」がそのまったき独自性において肯定されることである。にもかかわらず、恋の相手の眼差しは、私をその独自性において把握しない。私は彼の欲求を満たす限りにおいて必要な人間なのであり、彼の欲求を満たす別の人間が現れば、いつでも入れ替えることのできる存在でしかない。

（雨宮 2008：30）

以上の考えにおいて、雨宮（2008）は恋の関係性では「常に自分の有り様と他者の有り様に対して不満を抱き続け、自―他関係の中で満たされることはない」のだとまとめている。しかし、この自他関係の矛盾と不満を解消するものが、愛であるとしており、その論旨を次の2.2.2にまとめる。

2.2.2 雨宮（2008）による愛の分析

雨宮（2008：30）は、恋と愛の違いは「他者の立ち現れ方」にあると主張する。その論説によると、恋する人間にとって他者は自己の欲求を満たすための「手段」でしかないが、愛の場合「他者は端的に自己において立ち現れる」（雨宮 2008：30）のであり、雨宮（2008）はこれを فرانクルの人生の意味に関するコペルニクス的転回の考えを元に、愛の「自己超越性」を考察している。

始めに、雨宮（2008）はフランクルのコペルニクス的転回の理論が恋と愛の区別に用いられるものではなく、人生を投げ出そうとしている人間を扱うものであることを言及した上で、しかしこの観点こそが愛の「自己超越性」を導くものであるとしている。コペルニクス的転回とは、人生の行き詰ったときには人生の意味そのものが消失したのではなく、考え方に問題があるため、人生への態度を逆転させることにより意味が発見できるという考え方の転換のことを指す。雨宮（2008：31）は、この転換を「問うもの」から「問われるもの」「答えるもの」への転換」という解釈として論じている。

雨宮によれば、人は人生に対して問うものとして存在している限り「自己を中心にして世界との関係を構築している」雨宮（2008：31）のである。自己中心的な考えは世界または他者が自己のために動き、自己の独自性があるがまま肯定することを期待するのだが、上にも見たように、結局それでは他者との関係がその独自性をもって構築されない。雨宮（2008）の論説中には、存

在の本質は「自己超越」にあるというフランクルの主張が取り上げられ、またこれを「Bei-sein」(もとに一在ること)として説明していることを挙げている。「Bei-sein」の特徴は「主観と客観の分裂の以前」(雨宮 2008: 32)であり、ここで重要なのは自己は本来世界の元に、世界は自己の元にあったのだと認識することであると、雨宮 (2008: 32)は言う。主観と客観が分裂していない状態において、存在はそれ以上遡り得ない神秘的存在であり、それに気が付いた時、ひとは原理的に説明のつかない存在そのものに対して驚異の念を抱かざるを得ないのだと雨宮 (2008: 33-34)は述べている。この驚きがそのもの(ここでは他者のほかに、息を吸うことなども例に挙げられている)を「独自性において捉えることを可能にする」(雨宮 2008: 34)としている。雨宮 (2008: 34)は「自己の立場を中心として生きている人間には一切、手も足も出ない独自性と完全性」に「深く打たれ、嘆息することが、愛」であると示している。

以上に見られるように、雨宮 (2008) は、自己という枠を逸脱して他者の独自性を理由や条件なしに受け入れることこそ愛であると主張している。次項ではこれまでに見た雨宮 (2008) の呈示する恋と愛に関してまとめる。

2.2.3 雨宮 (2008) のまとめ

上に述べたように、雨宮 (2008) は恋と愛の違いを自己の種類の違い、すなわち「自己中心性」と「自己超越性」で区別している。そもそも二者における他者の存在の位置づけは異なっており、恋の場合は自己の欲求を満たすための手段として、愛の場合は類まれな存在への驚きとして捉えられている。それは自己が他者(論説内では世界とも表現されている)との関係の構築に、自己—他者という対立関係を築くか、自己⇄世界という相互関係を築くかの違いが生まれるからである。自己が主体となれば、つまり雨宮 (2008) の「自己中心」的状态にあれば、他者とは対立者であり自己肯定の欲求は満たされない。一方、主客分裂しなければ、つまり雨宮 (2008) の「自己超越性」にあれば、他者への驚きとその独自性への感銘で自己を含む世界も満たされるのである。

本稿では、以上に示した雨宮 (2008) の考察を概ね肯定し、恋と愛の比較に用いる。

2.3 難波江 (2004) による J-POP の分析

本節では、現代において人々のもつ恋愛への感覚を、難波江 (2004) の主張を元にする。難波江 (2004) は J-POP の風潮から、恋愛に対する見解の移り変わりを提唱している。以降では、現代の恋愛感覚に関する見解をまとめ、現代の恋愛の風潮を読み取る。

恋愛感覚の変遷と若者のもつ恋愛に対する感覚を見ると、現代の恋愛感覚は、過去に持たれていたものとは大きく異なっているといえる。

一九七二年には、…(中略)…旧世代の「恋愛」のアイデア(理想のイメージ)として現実の背後へ退いていた。それゆえ日本の恋愛の言説も、このことにはすでに「(男=強者)>(女=弱者)」のレベルから「男/女」のレベルへ推移していた。(難波江 2004: 76)

ここで述べられているのは以下のようなことである。まず、1972年の段階では、(男=強者)>(女=弱者)という図式が成立していた。男性は強者であり、女性は弱者である。男性は女性を支配するとともに女性を庇護する。女性は男性に服従するとともに男性から保護される。このような関係が(男=強者)>(女=弱者)として示されている³。

これに対して、「男/女」のレベルというのはどういう意味であろうか。1972年から現在に至

³ 雨宮の理論の中では、「相手を支配することによって、あるいは相手に従属することによって、一体化を謀ろうと目論む」(雨宮 2008: 28) ことに当たると考えられる。

る過程で男女関係は変化している⁴。恋愛という点において男女のレベルが平等になり、男性が女性を守る、または女性が男性に守られるということは幻想にすぎなくなった。本来「女らしさ」を示す「服従」（「あなたについていく等」）の表現を、男性が歌詞の中に使用する逆転も起こっている。このことから考えると、つまり現代の我々は「男>女」「女>男」と表現できる。つまり、男性が上になる場合もあるし、女性が上になる場合もあるという意味である。これによってある種の平等な関係が成立する。これを示したのが「男/女」という図式である。

また「平成の若者たちは恋愛に刺激を求めている」（難波江 2004：152）とも論じており、現代の若者は恋愛という刺激をツールに、飽和されたつまらない人生に刺激を与え、人生に対する面白みを求めているとも考えられる。難波江（2004：152）の説によれば、現代の若者は「ひとりではいられない症候群」であるのだ。さみしさを昇華し他と繋がるための手段、それが恋愛なのである。

本稿では詳細に論じることはないが、難波江（2004）は恋愛に関する鋭い分析を含むとともに、J-POPの分析手法に関して学ぶべきところの多い好書である。

2.4 まとめ

本節では、2.1でメタファーの成立概念、2.2では恋と愛に関する研究、2.3でJ-POPの変遷にみる現代の恋愛に対する感覚について概説した。次節では、恋と愛それぞれに関するJ-POPの歌詞データと大学生を対象にしたアンケートの結果を挙げて論じる。

第3節 J-POPの歌詞に見る恋と愛

本節では歌詞検索エンジン「歌詞ナビ」を用いて、恋と愛というキーワードを含む歌詞表現を期間、速度、方向性の3つの観点から概観する。まず、3.1では期間に関する歌詞表現を、次に3.2では、速度に対する歌詞表現を、3.3では方向性に対する歌詞表現を紹介する。続いて3.4では恋と愛のイメージに関して大学生30人に行ったアンケートの結果をデータとして取り扱う。最後に3.5で本節における内容をまとめる。

なお、その歌詞表現が恋または愛を指すものと判別する手段として、タイトルが「恋」を含むものであれば恋に関する歌、「愛」を含むものであれば愛に関する歌とした。また歌詞データ上、そのメタファー表現の前後2行にどちらかのワードを含んでいればそれに関する歌詞であるとした。いずれの場合も英語の“love”は研究対象として取り扱わない。また、本稿の愛は「恋愛」の意味での愛を指し、家族愛や親愛などの歌詞表現もデータ対象として取り扱わない。

3.1 期間

本節では期間の観点から恋と愛の歌詞データを紹介する。3.1.1で恋は即時的、3.1.2で愛は永遠であることを反例も取り扱いつつ考察する。

3.1.1 恋は即時的

本項においては、恋が一時的または即時的なものであるという歌詞データの分析を行う。

まず、(1)から(7)のように、恋は終わりがあることが前提として表現される。(6)の「恋のプログラム」「時間がくれば終わる」のフレーズをみると、恋が一時的な現象であると捉えられていることがわかる。また(1)や(3)に見られる「いつか終わってしまう」「永遠を誓ったはず」のように、終わることをマイナスに捉える場合が多くみられる。

⁴ これは、主に80年代末から90年代初頭にかけて発生したバブルの崩壊という経済現象とそれに伴う不況、および女子正規雇用の縮小と続く若年男子正規雇用の縮小が原因となっていると著者は考えている。

- (1) いつか終わってしまう恋なら 今は一瞬も離れたくない (I miss you / 加藤ミリヤ)
- (2) 好きで 好きで 好きで 仕方のない恋で終わりたくない
(好きで, 好きで, 好きで。 / 倅田來未)
- (3) 夏の夜に 空咲く花火 ふたり見上げ 永遠を誓ったはずなのに
(秋恋 / Skoop On Somebody)
- (4) そうね かなわぬ偶然 きっとこの恋もリミット
(あなたに会いたくて / Dream Come True)
- (5) 尽きる事なく溢れる想いにも いつか終わりが来るんだらう
(静かな恋の物語 / Aqua Timez)
- (6) 恋のプログラムを狂わせないでね 出逢いと別れ 上手に打ち込んで 時間がくれば終わる
(プラスチック・ラブ / 竹内まりあ)
- (7) あっという間に この恋の終わり 意外と静かに (恋の終わりは意外と静かに / ケツメイシ)

次に見る (8) のような反例も挙げられるが、全体の割合から見ると2割にも満たない。またこの反例に関しても、恋は終わるという前提の認識がある上で、それを否定することにより恋を愛に近づけ、永遠に対する美徳を醸しだしているように考えられる。

- (8) 恋が皆いつか終わるわけじゃない (Trust / 浜崎あゆみ)

つぎに (9) から (13) までの歌詞データを考察する。ここでは恋が季節、とくに夏の一区切りで表されているものを取り扱う。ある季節という数ヶ月間を前提と捉えている点に関して、このような表現も恋を一時的なものであるという前提の上に成立しているものである。また、全体的な傾向として特に夏という表現が多く見られることがわかった。

- (9) 恋の季節を駆け抜ける度 目に見えない宝石, 身につけていく
(恋の魔法 / GIRL NEXT DOOR)
- (10) Hello, my friend 君に恋した夏があったよね (Hello, my friend / 綾瀬はるか)
- (11) ひと夏の恋を 求め ビーチに 集まる honey bee (君だけを映して / 彩冷える)
- (12) 燃えて 燃えて 枯れた 夏の恋に 触れた (September / Hysteric Blue)
- (13) この夏限りの恋にとびこんで イイコトしようよ (イイコトしようよ / 風味堂)

(14) から (20) までのデータでは、「恋におちる」という表現を取り扱う。落ちるという現象は即時的で瞬間的なものである。かつ、この表現においては無意識的で、偶然になされているものと考えられる。このことから、恋は瞬間的ななおかつ無意識的と認識されていることがわかる。

- (14) その笑顔 その涙 ずっと守ってくと決めた 恋におちて i love you
(恋におちて / 坂詰美紗子)
- (15) 恋に落ちれば アベコベな心が躍りだす (恋心 / コブクロ)
- (16) 星空で笑った 横顔みてた ああ いま 恋に墮ちた (SECRET ADVENTURE / MEG)
- (17) ふたりで落ちた 恋の魔法 (LOVE RAIN ~恋の雨~/久保田利伸)
- (18) もうろう 恋に墮ちた (くちびるモーション / PUFFY)
- (19) わがままでも勝手でもね 今君に逢いたいよ 私 恋に落ちていく途中
(Way to love ~最後の恋~ feat. 唐沢美帆 / SouJia)

- (20) この恋の結末さえ 知っていれば 恋に落ちて なかったのかな??って
(あなただけが/倅田來未)

(21) から (28) では、瞬間的な表現について考察する。上から順に見ていくと、「瞬間」「すぐ(に)」「気づいた時に」など、恋は時間的にすばやく瞬間的に発生するものであると表現されている。加えて、「ひらめく」「触れたら最後」のように一瞬での行為を用いた比喩であることから、恋が上のように捉えられているとも考えられる。また (28) を考えると、kiss という一瞬の行為が始まるきっかけとなり、その上恋がワンナイトという短く区切られた時間なので上記の一般化が当てはまる。

- (21) ごくごく普通の女の子だったが 笑った瞬間に 僕の体が痺れた (恋熱/キマグレン)
 (22) 出会ったら すぐ 恋になった (Go Girl ~恋のヴィクトリー~/モーニング娘。)
 (23) 出会ってから すぐに “恋”だとわかった (恋/菅原紗由理)
 (24) 気付かないでよ 気付いてみてよ 目が合えば恋になりそうで
(ちこくしちゃうよ/いきものがかり)
 (25) かけがえのない 一人の人と 気づいた時に 恋が芽ばえる (マイレディー/郷ひろみ)
 (26) あれは何だろう!? きっとそうだろう!! 恋の予感ひらめいた
(雨だらけの恋/GO!GO!7188)
 (27) やっぱ恋みたい 触れたら最後よ 暴れだすライオンガール (TOUCH&LOVE/福原美穂)
 (28) ほら kiss は始まる合図 恋のワンナイトショウ (Roll Over The Rainbow/Superfly)

(29) のように恋を永遠のものと捉える例もあるのだが、割合で見れば1割程度にしかならない。このことから、恋の間隔は短い期間と認識されているといえる。

- (29) わかってるよ でもこの真心を 永遠のはつ恋と呼ばせて (はつ恋/福山雅治)

以上、「いつか終わる」「恋の季節」「恋に落ちる」「すぐに」などの表現群から恋が即時的であることを主張した。次項では愛は永遠に関するJ-POP表現を紹介する。

3.1.2 愛は永遠

本項においては、愛は永遠で終わりが無いことを示す歌詞データの分析を行う。まず、愛は「永遠」であるという表現を考察する。3.1.1の恋の表現とは対照的に、愛に関する表現はほぼ100パーセントといって良いほど、永遠であるという表現が用いられている。(33)では、一つ前の恋が「最後の失恋」になる時、二人の「恋が愛になった証」であるとしている。このことは、恋は終わるものであるが愛は永遠に続くという前提を示していると解釈できる。

- (30) 愛は永遠です 君はほくの勇氣です (50年後も/KAN)
 (31) 2人寄り添って歩いて 永久の愛を形にして (キセキ/GReeeeN)
 (32) その手に触れて 心に触れて ただの一秒が永遠より長くなる (アイ/秦基博)
 (33) 前の彼とが 君の人生最後の失恋だったって いつか思える日が来たなら
この恋が 愛になった証 (Diary/コブクロ)
 (34) 絶え間なく注ぐ愛の名を 永遠と呼ぶ事ができたなら (HOWEVER/GRAY)
 (35) 永遠を映す あなたを愛す I live my life for you 今はまだ夢の途中
(In-mail feat.JUJU/童子-T)

- (36) もしもあなたが永久の愛を約束しても
(shooting star ~シューティングスター~/ My Little Lover)

次に時間的に長く続く表現について考察する。(37) から (39) までは、それぞれ「愛し続けられる」「ずっと」「時を超える」の表現から長く続くことが前提となっていることがわかる。また(40) では「四六時中」とあることから、永続的な展望であり、かつ日々の中の毎日という繰り返しが暗に含まれている。(41) では空という広くどこまでも続く不変的なものを取り上げることで、未来も愛し続けるという合意を強めている。

- (37) 私一人だけを 愛し続ける事ができるって? 本当かな・・・ (breaking heart / Chara)
 (38) 多分だけど ずっとと愛してられる そんな気がする (愛と平和 / My Little Lover)
 (39) 時を超えるこの想いは 愛の他何があるのでしょうか (一番綺麗な私を / 中島美嘉)
 (40) いつまでも足並み揃えて 2人で歩いていこう 四六時中僕は あなたの事を 愛し続けるよ…
(本当の気持ち / Sonar Poclet)
 (41) どこまでも 続いている 空のように 愛したい 未来 (あした) も
(Heart / Do As Infinity)

次に「愛は終わらない」ことを意味する表現群をまとめる。時間的なもので捉えると終わらない永続的な表現が多く見られることから、愛は「終わらない=永続的」であると考えられる。

- (42) あふれる想いを 限りない愛を (Dawn / SMAP)
 (43) 果てない愛を 二人の時間を 取り戻せない僕だよ (抱きしめて / 河村隆一)
 (44) せめて終わることのない愛を 強く誓う (summer / 安藤裕子)
 (45) もう誰にも邪魔はできない 終わりの無い愛のスタイル (レモネード / スキマスイッチ)
 (46) その全てを抱いて僕は誓うんだ そう… 終わらない愛を歌うだろう
(ワンランド / PENGIN)
 (47) 終わりになき愛を 君に捧ごう (光 / BREAKERZ)
 (48) 抱きしめて 離さないで 終わらぬ愛 探し続けたい
(be alive ~そのままの君でいて~ feat.Soulja / 小柳ゆき)

次のような「愛は終わるもの」と捉える反例も存在するが、比率的には7対3で永続的な表現が多い。

- (49) Ah 愛が終わる音 聞こえた気がして (愛の音 / moumoon)

最後に、上記の終わらないことに類似した「変わらない」を含んだ表現をまとめる。終わることに関しては反例も多かったのだが、この表現においては減多に見られない。つまり愛が永続的であるのは、時間がいくら経とうとも不変であることが理由であると示唆される。

- (50) いつの日も 変わる事のない愛をくれた あなたがいて 歩いてこれた
(道しるべ / mihimaruGT)
 (51) 君はひとりじゃない 変わる事のない 愛はきっとここにある (Trust Me / 松下優也)
 (52) 変わらぬ愛を 二人は 疑いなく 永遠を誓う (ETERNAL LOVE / MEGARYU)

- (53) 一年を迎えても 変わらない二人でいよう どんな言葉も足りない 最高の愛に出逢えたね
(Sweet Voice / 鈴木亜美)
- (54) それでも変わらない あなたへの愛こそが大切 (大切 / FUNKY MONKY BABYS)

以上、「永遠」「ずっと」「終わらない」「変わらない」などの表現群から愛が永遠であることを主張した。次項では恋と愛の速度に関するJ-POP表現を紹介する。

3.2 恋と愛の速度

本節では恋と愛のJ-POP表現を速度の観点から考察する。3.2.1で、疾走する恋を、3.2.2で一歩一歩の愛を取り上げ、反例も取り扱いつつ考察する。

3.2.1 疾走する恋

本項においては、恋は疾走感のあるものという考えを示す歌詞データを集める。まず、(55)から(61)までデータでは「加速」に関するデータについて考察する。(57)と(58)では自身の感情が加速の対象となっており、それら除いた五つの表現では恋自体が加速するものとして捉えられている。加速した後の表現を比較すると、いずれの表現も明確なゴールや目標に向かってスピードを上げている訳ではないことがわかる。特に(59)では恋は加速後に「弾け」てしまい、(58)では恋が「迷路」と表現されていることから、目標は不明瞭であるといえる。また(60)では恋をウォーターライダーと比喻し、そのスピード感と落ちる感覚を恋の疾走感と即時性に当てはめている。同様に(61)では恋はジェットコースターであるという直喩が用いられている。

- (55) 恋はいつも 加速度がついて (Whisper / MAX)
- (56) 枯葉舞い 恋の雨が降る よれながら加速していくよ (エスカルゴ / スピッツ)
- (57) 走り出した恋夜風に委ね キミへの気持ちが加速する (Don't Stop / Tiara)
- (58) 加速する心 恋とは迷路 (Perfect lie / Superfly)
- (59) 君と出逢えた奇跡に 恋が加速度つけて 弾けたから (NECESSARY / Every Little Thing)
- (60) 今 スピードを上げて落ちる ウォーターライダーのように 僕らの恋も進めばいいな
(brand new story / 彩冷える)
- (61) 恋はジェットコースター 時のレールを走りながら
(ジェットコースター・ロマンス / KinKi Kids)

(62)は反例で、恋の速度は「ゆるやか」と記されている。このような表現は愛に関しては良く見られるが、恋に関しては9対1とあまり見られず、よってやはり恋に関しては「加速」するもので疾走感のあるものであると認識があるといえよう。

- (62) 出逢いは スローモーション 恋の速度 ゆるやかに (スローモーション / 中森明菜)

次に(63)から(71)に関して、「走る」というキーワードから考察する。(63)から(68)までは恋をしている主体が、その気持ちの高まりに呼応して「駆け出し」たり「走る」という行為に繋がっている。特に(67)や(68)は対象という目標があつての疾走であることが、「あの人の所まで」「あなたに恋して…中略…好きのまま走って」という表現からも見て取れる。また、(69)から(70)は恋自体が走り出すものと捉えられている。これは上とは違い、恋の始まりを「走り出す」で表現している。

- (63) ときめく恋に 駆け出し そうなの (恋におちて～Fall in love～/つじあやの)
 (64) 不器用なりに 全力疾走 けっつまづきそう (恋の確立変動/mihimaruGT)
 (65) 恋の季節を 駆け抜ける 度 目に見えない宝石, 身につけていく
 (恋の魔法/GIRL NEXT DOOR)
 (66) 今走るんだ どしゃ降りの中を 明日が見えなくなっても 君のために何でもやる
 (恋する凡人/スピッツ)
 (67) 走りだした足が止まらない 行け!行け!あの人の所まで
 (風吹けば恋/チャットモンチー)
 (68) あなたに惹かれあなたに恋して 好きだから好きのまま走って (NAO/HY)
 (69) My Love 君へ届けたいよ 走りだしたこの恋 (My Love/川嶋あい)
 (70) 恋が走り出したら 君が止まらない (HELLO/福山雅治)
 (71) 恋の予感が ただかけぬけるだけ (恋の予感/JUJU)

(72) や (73) のように恋も段階を踏んで一歩ずつゆっくりと進むことを示すものもあるが、比率的には大変低い。加えて、恋に関する「一歩ずつ」という表現は、愛のそれと異なり、自己が対象に近づくための道を進む表現であることがわかる。

- (72) 見えない糸に導かれて 二人は出会うための道を 一歩ずつ たどり続けて来たんだね
 (永遠色の恋/NEWS)
 (73) 恋のステップ 1. 2. 3 地道 に行くわ
 (How To Take A Chance～恋のかけひき～/松田聖子)

以上、「加速度」「走り出す」などの表現群から疾走する恋について記述した。次項では一歩一歩の愛に関するJ-POP表現を紹介する。

3.2.2 一歩一歩の愛

本項では、愛は速度的にゆっくりであるという歌詞データの分析を行う。始めにここでは「歩く」という表現が用いられているものについて考察する。歩くことはもちろん、周知の通り速度的には遅いものである。それに加えて、(76) や (77) のように「ゆっくり」という副詞が用いられることで更に速度を落とした、徐々に進む感覚が伝わる。また (79) の「歩幅合わせて」や (80) の「足並み揃えて」といった表現からわかるように、恋の「自身→相手」という方向性とは異なり、愛は相手と2人「共に」ゆっくりとした速度で進むことが前提となっている。

- (74) もう一度だけ 二人 歩けるのなら その手握り 君を愛する (希望の桜/DEEN)
 (75) 2人寄り添って 歩いて 永久の愛を形にして (キセキ/GReeeeN)
 (76) 愛する人と信じる道を さあ ゆっくりと歩こう (赤い糸/コブクロ)
 (77) 手探りでいい ゆっくりと幸せへと歩いていける どんときも 愛に抱かれて
 (愛に抱かれて/Superfly)
 (78) 2人で 共に歩み お互いに育み 2人の心永久に 離れないように
 (はぐくみ愛/MEGARYU)
 (79) 歩幅合わせて 歩いていこう それがふたりの 愛のかたち (Chu Chu Chu!/テゴマス)
 (80) いつまでも 足並み揃えて 2人で 歩いていこう 四六時中僕は あなたの事を 愛し続けるよ…
 (本当の気持ち/Sonar Pocket)

次に「歩く」という表現を用いていないが、速度的にゆっくりである表現の歌詞データを考察する。(81)の「融かして」という表現は先の「凍えたキミの lips」にかかっており、融解する速度は特別な状態を除いてゆっくり進むものであることからゆっくりとした変化を示しているといえる。同じように(82)では愛の船を「漕ぐ」のであるから、この表現上こちらも速度的に遅いといえる。また(83)から(85)に含まれる愛を「育てる」という表現に関しても、各々に「ゆっくり」と表記されていることもあるが、普通何らかのものが成長を遂げる際にはゆったりとした遅いスピードで進むことが前提にあるため、同様である。最後に(86)に関して言えば「バラード」という曲のスピードが比較的ゆっくりとしたものと愛をメタファー表現に用いたことで、愛は速度的にゆっくりという認識があるといえる。

- (81) 凍えたキミの lips ゆっくり融かして 愛色に飾りたい (Come With Me / V6)
 (82) あなたと愛の船 今漕いで (くちびるモーション / PUFFY)
 (83) 形の無い愛を二人で いつまでも育ててゆこう (キミだけ / 小池徹平)
 (84) ゆっくり ゆっくりと過ごしている 時間が愛を育てていくよ
 (どらごん・ろ〜ど / Kinki Kids)
 (85) わがままだよと 終わらないで ゆっくり 愛を育ててね
 (あなたのいらだちと私の理由 / 岩崎宏美)
 (86) 二人の愛は バラードがいい すごくゆっくり 進むのがいい (愛はバラード / 広瀬香美)

以上、「歩く」「ゆっくり」などの表現群から一步一步の愛を論述した。次項では恋と愛の方向性に関するJ-POP表現を紹介する。

3.3 恋と愛の方向性

本項ではJ-POP表現の中から恋と愛の方向性について論じる。3.3.1で恋は一方方向であること、3.3.2で愛が双方向であることを反例も取り扱いつつ考察する。

3.3.1 一方的な恋

本項においては、恋は対象に対して一方的であるという歌詞データの分析を行う。初めに恋を「追いかける」という表現を取り扱う。(87)から(89)までは恋をしている対象を追いかけるという表現が用いられ、それぞれ「あなた」「君」といった対象に対する一方向性がみられる。(89)に関しては特に対象の記述はないが、「さっきまで一緒に過ごして」いたという表現からその相手を「追いかけ」たことがわかるため、この場合も恋の対象である存在に一方的に距離を縮めたといえる。同じく(91)に関して見ても、追いかけた先で「君の手を握」ったことから、この「君」を対象に追いかけていたことがわかる。ゆえにどちらの場合も一方向性が見られる。(90)や(92)にも対象の記述はなく、強いて言えば恋自体が対象化されているが、(90)の場合は「追いかけたって 追いつきようがない」ことから、(92)の場合は「追いかけて (走ってく恋の)」という表現から、両者ともに対象と進行方向が同じでそれを追いかけていることがわかる。よってここでも対象に対する一方向性が成立する。

- (87) 追いかけて 近づいて やっと叶った願い 今夜こそ手に入れる あなたを
 (恋の魔法 with 小沼ようすけ / 植村花菜)
 (88) ゴールにいつも届かないサッカーは 君ばかり追いかけてた (初恋 / 中村中)
 (89) さっきまで一緒に過ごして じゃあねって手を振ったのに 気付けば
追いかけて 高まる鼓動 (恋する瞳は美しい / Superfly)

- (90) 恋の行方は どこまで追いかけたって 追いつきようがない (Regret of the Day / globe)
 (91) 恋も夢も終電車も ごちゃまぜ追いかけた 君の手を握ると「痛い」と言った
 (キャンパス / 平井堅)
 (92) 追いかけて (走ってく恋の) 恋の足音みだせ! (Cherry Cherry / Chara)

次に「君」や「あなた」といった対象への一方的歌詞表現を考察する。これらは反例である(99)を除いて、いずれも「自分→あなた」という方向での思いをそれぞれの表現で伝えるという前提で描かれている。(97)に関して、下線部のみを見れば「逢いたい」は双方にいえるものであるかのように思われるが、その直前に「わがままでも勝手でも」とあることから、この思いは自分の一方的な思いであることがわかる。

- (93) 走りだした足が止まらない 行け!行け!あの人の所まで
 (風吹けば恋 / チャットモンチー)
 (94) 小さな恋の思いは届く 小さな島のあなたのもとへ (小さな恋のうた / モンゴル 800)
 (95) せめて今刻も恋のうた あなたに届けたい 君に唄う恋のうた (恋うた / 音速ライン)
 (96) 恋の矢あなたに今 解き放つ準備は できている (恋のつばみ / 倅田來未)
 (97) わがままでも勝手でもね 今 君に逢いたいよ 私 恋に落ちていく途中
 (Way To Love ~最後の恋~ feat. 唐沢美帆 / Soulja)
 (98) 私が今 恋に落ちた ただあなたに (This is Love / 加藤ミリヤ)

(99)の反例のように恋を「僕ら」や「2人」のものと表現する歌詞データも存在するが、全体的な割合から見ると対象に対する一方向性のものが7対3で上回る。

- (99) さあ、僕らの恋がよんでる (恋がよんでる / キマグレン)

最後に対象の表現なしに一方向性を表す歌詞データを順番に考察する。まず(100)では恋=一人称とされていることから、「私」のみが恋の主体であることがわかる。同様に表現は違うが恋を自分勝手だとしている(101)も恋の主体を自身のみに絞っているといえる。(102)に関していえば、「片方から」という表現からあることから、恋の一方向性を明確に示している。(103)は、恋は自身の思いから構成され、愛は双方の思いが通わなければ成立しないと示されていることから、恋の一方向性をより明確に示しているものといえる。

- (100) あなたの小さな優しさで 生きて行けるわ 私の恋は一人称 (恋 / Pabo)
 (101) 知らずに壊れてく 自分勝手だった恋 (あの日…feat. 童子-T / CHEMISTRY)
 (102) 片方から つなげば欲しいもの それが恋というもの? (Only you / Chara)
 (103) 恋はひとりでできて 愛はひとりじゃできない (時の雫 / GIRL NEXT DOOR)

(104)の反例をみると、(103)とは対照的に恋が一方向性の終わりと同時に2人によって始まるものとしている。これに似た表現は上に同じく存在するものの、割合的には8対2と、やはり一方向としているものの方が強いので、恋は一方的であるといえる。

- (104) 片思いの ending 2人が始まる story 生まれたばかりの恋だから (I'm yours / May J.)

以上、「追いかける」「あなたへ」「片方／ひとり」などの表現群から恋が一方的であることを主張

した。次項では愛は双方向に関する J-POP 表現を紹介する。

3.3.2 双方向の愛

本項では愛は双方に思い合う関係であるという歌詞データを分析する。

ここでは愛が対象と自己と「共に」という双方の関係性の成立について考察する。(107)の「君と僕 そこに生まれる愛」をみると、この表現では「君」と「僕」が「共に」あることによって「愛が生まれる」のであるから、愛が発生する条件として対象と自己の相互性が欠かせないといえる。他の表現も同じように、愛の歌詞データ上、前提として自己と対象が共にあることが挙げられている。

- (105) 愛が何かを 君となら 見つけれそうだから (Trust In You / JUJU)
 (106) 君と出逢った奇跡を運命と呼ばせて 2人は愛を手に入れた (未来 / HY)
 (107) 1 + 1 = 君と僕 そこに生まれる愛 (みんなのうた / エイジア エンジニア)
 (108) 「愛してる」「ばかやろう」の繰り返し 共に成長できる愛に (Love Story / SOFFet)
 (109) 君と僕の腕時計 一緒に並べて 君と僕の手のひらを そっと重ねて
 愛という窮屈ががむしゃらに抱きしめた (ANSWER / コブクロ)
 (110) 愛する人と共に生きてる それで十分な幸せ 君と僕を繋ぐ音 大空に響いて飛んでけ!
 (奏逢 ~ Bank Band のテーマ ~ / Bank Band)
 (111) 君とここに居ることを 僕はそれを愛と呼んでいいのかい?
 (アニマロッサ / ポルノグラフィティ)

次に「2人(ふたり)」という表現を含む歌詞データの双方向性について考察する。まず(112)では「寄り添う」という表現から、自己と対象がお互いに傍に寄り添う意識が持たれていることがわかる。(115)の「共に歩み お互いに育み」という表現は相互関係がより一層強調されたものである。「歩む」ことも「育む」ことも一人でも可能なことであるのに対して、あえて「2人」でそれを行うという点において、自己と対象の同一化がみられる。これは「2人」という表現を持つデータにおおよそ全般的に当てはまるものである。(118)では「二人で 一つの愛」と表現され、自己と対象を同一への融合が愛であると捉えていることがわかる。

- (112) 2人寄り添って歩いて 永久の愛を形にして (キセキ / GReeeeN)
 (113) 愛することを 2人の喜びにして (Junior Sweet / Chara)
 (114) あなたといつも 同じ時間を重ねあうほどふたりは かけがえのない愛を感じながら
 永遠に繋がってく 未来のその向こうへ・・・ (It's a wonderful world / SMAP)
 (115) 2人で共に歩み お互いに育み 2人の心永久に 離れないように
 (はぐくみ愛 / MEGARYU)
 (116) にぎりしめてる愛は一つだけ heart 強く感じたい 分かり合えた2人の心を
 (Love / 川嶋あい)
 (117) 一年を迎えても 変わらない二人でいよう どんな言葉も足りない 最高の愛に出逢えたね
 (Sweet Voice / 鈴木亜美)
 (118) 二人で 一つの愛になろう (not equal / モンゴル800)
 (119) いつまでも足並み揃えて 2人で歩いていこう 四六時中僕は あなたの事を 愛し続けるよ…
 (本当の気持ち / Sonar Poclet)

最後に「愛し愛される」という相互の関係性について考察する。これらの表現について考える
と、愛は相互に思い合わなければ成り立たないという前提に愛が歌われている。

- (120) 祈る空に手をのぼし つかんだものは 愛し愛されること (愛を歌おう／絢香)
 (121) 愛し愛されて過ぎる大切な時 そして香った (シアワセ／aiko)
 (122) 僕たちは 何もかも 違うから 愛しあった (蛍／福山雅治)
 (123) もっと愛されて もっと愛して もっともっと愛し合いたい
 (IT'S SO DELICIOUS／Dreams Come True)
 (124) 秘密のまま付き合うの？ 愛しあっているのに (Parade／YUI)
 (125) 愛しあいたい 今こそもっと with you (LOVE2010／flumpool)

(126) の反例のように、愛を「自己中」つまり自己からの一方的な思いであると捉える表現は
見られるが、比率で見ると8対2で双方向性が多く見られる。そのため、愛はお互いに思い合う
もの、つまり思い合う対象の双方向性が広く認知されているといえる。

- (126) 自己中な愛だけを書いたラブレター もうやぶれかぶれだ (裸の王様／D-51)

以上、「君と僕」「2人」「愛し愛される／愛し合う」などの表現群から愛が双方向であることを主
張した。次項では簡単なアンケート調査から3.1から3.3までのJ-POP表現が現代の若者の間で妥
当性を持っていること検証する。

3.4 恋と愛の相違を裏づけるアンケート調査

本項では、大学生30人を対象にした恋と愛に対するそれぞれのイメージに関するアンケートの
結果をみる。アンケートの際に出たイメージに対するキーワードを、以下に表として、恋と愛そ
れぞれに分類してまとめる。以下の表から読み取ると、恋に関しては気持ちの昂りを示す言葉が
イメージとして多く挙げられ、愛に関しては落ち着きを感じる言葉がイメージとして挙げられて
いる。このイメージのデータも参考に入れ、今後の分析に活用する。

表1 大学生30人を対象にしたアンケート調査結果

恋	わくわく、片思い、一途、ドキドキ、新鮮、下心、突然、一目ぼれ、失恋、 別れ、ときめく、波がある、タイミング、夏
愛	育む、結婚、一生、永遠、偉大、情熱、冬、まごころ、熱い、ほっこり、 はかない、同棲、協力、ずっと一緒に居る、あたたかい

これらアンケート調査の結果は、「突然」「一目ぼれ」「タイミング」「夏」などから恋の即時性と
速度を、「片思い」「一途」「下心」「一目ぼれ」から恋の一方方向性を検証しているように思われる。
愛では、「一生」「永遠」から愛の永遠性を、「協力」「ずっと一緒にいる」から愛の双方性を表し
ているように思われる。恋では「夏」、愛では「情熱」「熱い」「ほっこり」など、熱に関する表現
は恋と愛の双方に見られた。

また、この調査から「わくわく」「ドキドキ」「新鮮」「ときめく」など、心がワクワクする感情
が恋を形作っていることが見て取れる。これは、ジェットコースターなど速い乗り物は心拍数の
上昇を伴うなど交感神経を刺激することから、このような恋による感情状態の高まりは、恋を速

度と関連づける重要な役割を担っているのかもしれない。

3.5 まとめ

本節では、歌詞検索エンジンで検索した歌詞を恋と愛それぞれの論旨に沿った前提において分類し、アンケートによるイメージの調査をデータとして挙げた。次節では、本節で挙げたデータと第2節での先行研究への考察を元に、J-POPの歌詞に見る恋と愛の分析を行う。

第4節 分析

本節では、分析として、第3節の内容を4.1でまとめ、4.2でメタファーの観点から見たJ-POPにおける恋と愛を移動表現を元に考察する。4.3では4.2の分析を踏まえて、雨宮(2008)の恋と愛の分析がJ-POPにどのように表現されているかを確認する。4.3はまとめである。

4.1 恋と愛のJ-POP表現

第3節では、J-POPの恋愛表現を期間、速度、方向性の3つの観点から検討した。その結果、恋は即時的で、速度は速く、一方的であることがわかった。逆に愛は典型的に永遠で、その速度はゆっくりであり、双方向的であることがわかった。以下、J-POPの歌詞に見られる恋と愛の特徴をそれぞれ4.1.1および4.1.2で再提示する。

4.1.1 恋のJ-POP表現

本項では、J-POPの中に出てきた恋に関する表現から、恋とはどんなものか、全体像を内観的かつ総括的に論じる。恋は一瞬で始まる。(24)ではその瞬時性を表す一例である。

(24) 気付かないでよ。気付いてみてよ。目が合えば恋になりそうで
(ちこくしちゃうよ／いきものがかり)

恋が一瞬で始まるのは、「恋に落ちる」という表現からもわかる。それは一瞬で、自分の意志にかかわらず、外的な力のように感じられる出来事である。恋は自分の意志ではコントロールできない現象である。ある人のことを好きになった時点で自分の心の状態が変わる。相手に惹かれる気持ちでいっぱいになって、相手に近づきたいと思う。3.2.1で触れ、4.2.1でも再論するように、恋には「走る」という表現が多い。

(63) ときめく恋に 駆け出し そうなの (恋におちて～love～／つじあやの)
(57) 走り出した恋夜風に委ね 君への気持ちが加速する (Don't Stop / Tiara)

恋に相手は存在するが、その対象は全体性の欠けた刺激に過ぎず、その刺激に対する反応として衝動が生まれる。いてもたってもいられなくなり、その相手に向かっていきたくて仕方がなくなる。その意味で、一方向的である。相手が自分のことをどう思うか、二人がどうしたいかを問わず、自分が相手に対して持つ好意、日常とは変容したその精神状態、そして相手に近づきたい、相手のことを知りたい、相手と一緒にいたいと思うその衝動が恋である。

4.1.2 愛のJ-POP表現

本項では、J-POPの中に出てきた愛に関する表現から、愛とはどんなものか、全体像を内観的かつ総括的に論じる。愛の表現で特徴的なのは、「永遠」との共起である。また愛とは意志的かつ

主体的なもので、「誓う」ものである。それは約束でもある。

(39) 時を越えるこの想いは 愛の他に何があるのでしょうか (一番綺麗な私を／中島美嘉)

(37) 私一人だけを愛し続ける事ができるって？ 本当かな・・・(breaking heart／Chara)

永遠は無限に長い時間の世界、または時間のない世界である。その世界の中で時間は過ぎることなく、すべてのことが無変化であることは当然であろう。永遠の愛の世界はうつろうことがなく、時間はあるとしてもとても緩やかである。

永遠の愛の世界はお互いがお互いに愛し合っている相互性の世界である。これは(103)のような表現から明白である。

(103) 恋はひとりでもできて 愛はひとりじゃできない (時の雫／GIRL NEXT DOOR)

また、以下に見る「愛し愛され」「愛し合う」といった表現が可能であることもその傍証といえよう。

(120) 祈る空に手をのばし つかんだものは 愛し愛されること (愛を歌おう／絢香)

(123) もっと愛されて もっと愛して もっともっと愛し合いたい

(IT'S SO DELICIOUS／Dreams Come True)

愛の特徴は一体化であるように思われ、その方法はお互いがそれぞれ一人一人の平等な立場の人間としてひとつになることに思われる。

4.2 恋と愛の移動表現—JPOPのメタファー分析—

本項ではメタファーの観点から恋と愛がどのように分析できるかを検討する。このため、特徴的であると思われる恋と愛の移動表現を比較する。その結果、恋における移動は相手に引きよせられる〈恋は物理的力〉に基づいており、愛の移動は両者が一緒にゆっくりと歩む〈恋愛は旅〉に基づいていることを主張する。

4.2.1 恋の移動表現のメタファー分析

恋に関するJPOPの移動表現を拾い上げると以下のようなものがある。

(19) わがままでも勝手でもね 今君に逢いたいよ 私 恋に落ちていく途中

(Way to love ～最後の恋～ feat. 唐沢美帆／SoulJa)

(57) 走り出した恋夜風に委ね キミへの気持ちが加速する (Don't stop／Tiara)

(67) 走り出した足が止まらない 行け！行け！あの人の所まで

(風吹けば恋／チャットモンチー)

(89) さっきまで一緒に過ごして じゃあねって手を振ったのに 気が付けば 追いかけて

高まる鼓動

(恋する瞳は美しい／Superfly)

こういった表現の特徴の第1は、移動がとても早いことである。さらに(57)に加速度といった表現があり、類例も多いが、加速度は重力による自由落下などに代表され、力が作用しているときの物体の運動に特徴的である。もちろん、「恋に落ちる」というのは他動的な移動の典型であろう。移動の先は、恋または相手であり、それは(57)の「君への気持ち」、(67)の「あの人の所

まで」, (89) の「追いかけて」の対象やこれらの類例から明らかである。

このような内容から、恋の移動表現の特徴は〈恋は物理的力〉メタファーの特徴と合致すると思われる。J-POP 表現から 2 節の (2) で挙げたこのメタファーの写像を図 1 に記述する。

自分	←	物体
相手	←	着点 (別の物体)
相手を好きになる	←	引っ張られる
相手を思う気持ち	←	物理的移動
強い気持ち	←	速い速度

図 1 J-POP 表現から見た〈恋は物理的力〉の写像

図 1 は概略的な写像であり、ひとつの用例に過ぎないが、典型的な場合、自分は意図を持たず、相手の魅力などに対して抗しようもなく引きつけられる。移動の着点は自分を魅了している好きな相手である。近づけば近づくほどその思いが強くなる点は加速度に反映されている。

4.2.2 愛の移動表現のメタファー分析

愛の移動表現は 3.2.2 で見た「一歩一歩の愛」の表現に尽きる。

- (74) もう一度だけ 二人 歩けるのなら その手握り 君を愛する (希望の桜 / DEEN)
 (75) 2人寄り添って歩いて 永久の愛を形にして (キセキ / GReeeeN)
 (76) 愛する人と信じる道を さあ ゆっくりと歩こう (赤い糸 / コブクロ)
 (77) 手探りでいい ゆっくりと幸せへと歩いていける どんなときも 愛に抱かれて
 (愛に抱かれて / Superfly)
 (78) 2人で共に歩み お互いに育み 2人の心永久に 離れないように
 (はぐくみ愛 / MEGARYU)
 (79) 歩幅合わせて 歩いていこう それがふたりの 愛のかたち (Chu Chu Chu! / テゴマス)
 (80) いつまでも足並み揃えて 2人で歩いていこう 四六時中僕は あなたの事を
 愛し続けるよ… (本当の気持ち / Sonar Poclet)

これらの表現は、2 節の (1) に見た〈恋愛は旅〉メタファーと合致する。この写像を以下に図 2 に記す。

自分	←	旅人
相手	←	同伴者
生きること	←	移動

図 2 J-POP 表現から見た〈恋愛は旅〉の写像

ここでは目的地は特に明示されない。二人の向かう先は特に問題ではなく、今この時間を一緒に過ごすことが重要だからである。また、移動の様態はゆっくりりであるが、これはゆっくりり生きることだけを意味するわけではなく、永遠である世界に時間の経過は必要なく、変化しないことを意味するものとも考えることができる。

ここまで、認知メタファー理論に基づいて、〈恋は物理的力〉メタファーおよび〈愛は旅〉メタファーがそれぞれ顕著であることを論じた。付記すれば、〈恋は物理的力〉は、物理的力を元フレームとしている点で知覚的メタファーと分類でき、〈愛は旅〉は、旅という文化的概念を元フ

レームとしている点で概念メタファーと分類できることは興味深い点である。

次項では、ここまでの分析を前提に雨宮の自己の定義による恋と愛の分析がJ-POPの表現をどのように説明するかを検討する。

4.3 自己関係性から見た恋愛のJ-POP表現

本項では、J-POPの恋愛表現を雨宮（2008）による恋と愛の分析の観点から検証する。4.3.1で自己中心性と恋を、4.3.2で自己超越性と愛を検討する。

4.3.1 自己中心性と恋

雨宮（2008）によれば、恋は対象に関する尋常ではない関心の集中が発生している状態であるため「一過性」のものである。つまり恋の状態は短期間として捉えているのである。また雨宮（2008）は恋の初期は対象に「尋常ではない関心の集中」（雨宮 2008：24）を持つと述べていたことから、恋自体が「走る」というスピード感があり、瞬発的な力の発生が読み取れる表現は恋の発生に対応することが読み取れる。

恋の特徴は「自己中心性」（雨宮 2008：23）にあり、また恋の状態では自己肯定の欲求の充足を求めて対象に近づくものである。これを前提において考えると、「追いかける」という表現はまさに、自己の存在を認めて欲しいという自己中心的な欲求を持って、距離を取る対象に近づく「一方的」な感覚が読み取れる。雨宮（2008）が恋の初期段階が過ぎると欲求の主体同士として近づく恋の形ではいずれ衝突すると述べたように、自分勝手つまり自己中心的な行動による対象との関係性の破綻が描かれている。これが恋が長く続かない原因である。

4.3.2 自己超越性と愛

雨宮（2008）の説によれば、恋は初期を過ぎると「一体化」の願望が生まれるものである。しかし、恋において自己の欲求が主体となるため、この一体化の願望は満たされることなく、フラストレーションから恋の関係性が破綻することは必然であることが示唆されており、ゆえに恋に「永遠」はありえないと考えられる。

一方、愛は他人の存在に驚きその存在をそのまま受け入れることであり、そこでは自己の欲求は遠のくものであるとされている。つまり対象に対する欲求とその不充足による不満が溜まらないため、恋のような関係の解消が起こらない。よって、この状態は長く続くと考えられる。(37)や(38)のように、愛の状態では「愛し続ける」「ずっと愛してられる」のような表現が見られる。雨宮（2008：32）によれば、愛は「主観と客観の分裂以前」の状態であることから、この自己と他者の「共に在る」状態は愛特有のそして当然の状態なのである。

愛は「主観と客観の分裂の以前」（雨宮 2008：32）であるとともに、自己という枠を逸脱して他者の存在そのものに驚き受け入れることでであると主張している。これを前提に3.3.2の歌詞データを考察すると、(107)の「1 + 1 = 君と僕 そこに生まれる愛」という表現では、自己と他者の融和、つまり主客の分別をつけないことにより愛が生まれるとされていると解釈できる。他の歌詞表現も同様に分析すると、いずれの場合も「君（もしくはあなた）」と「共に」あることによって愛が成立することが述べられている。(118)では上に見た(107)と同様に「二人で 一つの愛」とされていることから、自己と他者の一体化による愛の発生が見て取れる。また「2人」で「寄り添って歩く」「お互いに育む」「分かり合える」といった表現から、自他が互いに歩み寄り、そばにいて相手を受け入れる状態であることが読み取れる。

4.4 認知メタファー理論と雨宮（2008）のデータ適合度

本項では、4.2で述べた認知メタファー理論による恋と愛の性格づけと、4.3で述べた雨宮（2008）

の恋と愛の性格付けがどのように第3節で見たJ-POPの恋と愛の表現に適合するかを判定し、その理由付けを検討する。

まず、両者の適合度を示した概略的な関係を表1に挙げる。

表1 認知メタファー理論と雨宮（2008）のデータ適合度（イメージ図）

	恋			愛		
	恋は即時的	疾走する恋	恋は一方向	愛は永遠	一步一步の愛	愛は双方向
認知メタファー理論	▲	○	○	▲	○	×
雨宮（2008）	○	○	○	○	▲	×

以下に、表1を説明しながら、4.4.1で認知メタファー理論の適合度を、4.4.2で雨宮（2008）の適合度を論じる。

4.4.1 認知メタファー理論の適合度

認知メタファー理論を援用した本稿の分析では、〈恋は物理的力〉、〈愛は旅〉と考える。まず、〈恋は物理的力〉がJ-POPから抽出した恋の特徴に適合するかを検討する。物理的力がかかれば、対象はその方向に引きよせられ、その勢いには加速度が発生するので、認知メタファー理論は「疾走する恋」を説明すると考える。表ではこれを恋の真ん中の列の○で示す。

次に「恋の即時性」について論じる。〈恋は物理的力〉メタファーにおける恋は、「疾走する恋」の意味で速いことが含意される。よって「恋の即時性」はある程度、関連があると想像できる。一方、物理的力が必ずしも即時性や一時性を含意するわけではない。これを恋の左の列の▲で示す。

「恋の一方向性」は、〈恋は物理的力〉メタファーが予測するところである。自分は相手の力に磁石に引きつけられる鉄のように引きよせられると考えられるからである。

次に、〈愛は旅〉がどのようにJ-POPから抽出された愛の特徴に適合するかを検討する。「一步一步の愛」は旅の手段を歩行とするならばまさにそのものといえよう。しかし、ゆっくりな移動といっても、移動と変化はあるので、「愛は永遠」というのは必ずしもこのメタファーが予測するところではない。終わりのない旅を想定すれば別である。または、「ゆっくり」というのが「速くない」という意味で不変を表すメトニミー（換喩）的表現と考えるならば、この表現を説明することも可能といえる。その意味で▲としている。

愛の双方向性は難しいテーマである。双方向性には表2に見るように3種類の段階があるように思われる。

表2 双方向性の要件

	2人であること	同じことをしていること	相手に対してしていること
認知メタファー理論	○	○	×
雨宮（2008）	○	×	×

3種類の段階とは、「二人であること」（双数性）、「同じことをしていること」（行為の同一性）、「相手に対してしていること」（相互性）である。双方向性が成立するためにはこの3点が成立していなければならない。〈愛は旅〉として、二人でゆっくり歩む旅の場合、双数性、行為の同一性は成立している。2人の旅人がいて、二人とも一緒に旅をしている。しかし、「愛し愛される」「愛し合う」といったように双方向性が成立しているわけではない。旅は一人のできるものであり、

その対象は特にない。「手を握る」「声を掛け合う」「抱き締め合う」「愛し合う」といった相互性が成立していないからである。その意味で、認知メタファー理論は双方向性を満たしていないように思われる。

次項では、雨宮（2008）がJ-POPの恋愛表現にどのように適合するかを検討する。

4.4.2 雨宮（2008）の適合度

雨宮（2008）によれば、恋は相手との間にある距離を縮めたいという願望が芽生え、「尋常ならざる対象への関心の集中」（雨宮 2008：24）が生まれる状態である。雨宮（2008：24）はこの状態は尋常ではないため、「一過性の状態である」とも述べており、恋の本質はその不安定さにあるとしている。これらの言及は、「恋の即時性」および「疾走する恋」の直接的説明になっていると考え、それぞれに○をつけている。恋においては「互いへの関心の集中が高まっていく過程」（雨宮 2008：27）にこそ醍醐味を感じるものであり、冷めて高揚感を失ってしまうと、それは恋に対する魅力がたちまち消滅してしまう。このことも、「即時性」と「疾走」を生む要因となる。

自己中心性という表現は、相手を全体性を持った一人の人間として受け入れることなく、単なる欲望の対象としてしか見ていないことを意味しており、まさに「恋の一方向性」が説明される。

次に、愛に関して雨宮（2008）の適合度を検討する。雨宮（2008）は愛の特徴を自己超越性としている。彼は同時にフランクに従って存在の本質が「自己超越」にあると議論しており、これを「Bei-sein」（もとに-在ること、バイザイン）として説明している。バイザインの特徴は「主観と客観の分裂の以前」（雨宮 2008：32）であるという。よって、雨宮による愛の特徴は自己を超越して世界と一体化し、原存在的な全体性の世界を回復することである。

さて、この考えに従えば、原存在的な世界は永遠の世界であることが想像でき、その意味で、「愛は永遠」は自明に導出される。「一步一步の愛」は、直接的には出ないが、認知メタファー理論同様、不変の世界のメトニミー的表現としてであればある程度適合するといえるので、▲を付す。最後に、「双方向性」であるが、表2に見たとおり、認知メタファー理論同様、双方向性の定義を満たしていない。自己超越は、個人が自己の垣根を取り払い、世界と再融合することを示している。他者を他者と認める点で、双数性は認められるが、相手が自分に対して同様にするかどうかは射程に入っておらず、その意味で、双方向性には×を付けている。

次項では、認知メタファー理論の適合性と、雨宮（2008）の適合性を統一的に論じる。

4.4.3 適合性のまとめ

表1を検討してまず目につくのは、恋が認知メタファー理論でも雨宮（2008）でもよく説明されるのに対し、愛がどちらでも意外に十分に説明されない点である。これは、4.2の最終部分で述べた知覚メタファーと概念メタファーの種類の相違に帰せられるのかもしれないが、知覚メタファーと概念メタファーという区分も含めて今後の検討が必要である。

次に、愛の双方向性がどちらの理論でも説明できない点が気になる。表2のように認定の基準を厳しく取り過ぎたからかもしれないが、認知メタファー理論の〈愛は旅〉から導出されるのは一緒にいることであり、雨宮（2008）から予測されるのは、他者をその存在そのままとして受け入れることである。どちらも双方向性とは異なる。どうしてこのような結果が生まれるのだろうか。

その解法のひとつの方向性は、J-POPという現代の詩歌の性質に求めることができる。「愛を誓う」「愛を捧げる」など、4.1.2で簡単に触れたように愛は誓うものであり、約束である。そう考えると以下のようなJ-POP表現に、「愛」がカギ括弧つきで語られていることがわかる。

(44) せめて終わることのない愛を 強く誓う (summer / 安藤裕子)

- (47) 終わりなき愛を 君に捧ごう (光/BREAKERZ)
 (119) いつまでも足並み揃えて 2人で歩いていこう 四六時中僕は あなたの事を
 愛し続けるよ… (本当の気持ち/Sonar Poclet)
 (125) 愛しあいたい 今こそもっと with you (LOVE2010/flumpool)
 (37) 私一人だけを愛し続ける事ができるって? 本当かな… (breaking heart/Chara)

「愛」の双方向性は理想的な世界の話で、J-POPの表現はこの双方向的な愛について語るけれども、それは「誓い」「捧げ」宣言する求愛の言葉で、「愛しあいたい」「本当かな」にも見られるように、その双方向的な「理想の愛」は、ほとんどの場合、宣言、呼びかけ、願望、疑問の文脈に埋め込まれているように思える。

4.5 まとめ

本節では、第2節の先行研究、第3節のデータを統合して分析を行った。4.1ではJ-POPの歌詞に見られる恋と愛の表現のまとめを行った。4.2では、これらの表現を認知メタファー理論の観点から分析し、〈恋は物理的力〉、〈愛は旅〉という2つのメタファーが代表的であることを論じた。4.3では、雨宮(2008)の理論が第3節のデータをどのように説明するか、自己中心性と自己超越性の立場から論じた。4.4では、両者がどのようにデータを説明するか、その適合性を再度検討した。

次節はまとめである。

第5節 結論

本節では、これまで述べてきたJ-POPの歌詞における恋と愛の違いについて、期間、速度、方向性の3つの観点から考察した結論を述べる。

まず第1節では本論文の構成を概観した。次の第2節では先行研究として、認知メタファー理論のLakoff and Johnson(1980)から既存の恋愛メタファーを、雨宮(2008)から恋と愛に関する心理学的分析を、難波江(2004)からJ-POPに見る恋愛観を紹介した。続いて第3節では、歌詞検索エンジン「歌詞ナビ」を用いて歌詞データを収集し、期間、速度、方向性の3つの観点から恋と愛それぞれのデータをキーワード毎に分類した。また3.4では大学生30人を対象に取った「恋と愛の認知的イメージ」に関するアンケート結果をデータとして挙げ、データの中からも現代の恋愛に関する感覚を読み取れるようにした。第4節ではこれまでに挙げた先行研究の内容とデータを突き合わせ、J-POPに見る恋と愛の特徴を再定義するとともに、認知メタファー理論、雨宮(2008)がこのデータをどのように説明するかを検討した。認知メタファー理論と(2008)は全体の多くを説明したが、恋愛の双方向性に関しては十分な説明が得られなかった。

雨宮(2008)によれば、恋は相手に対する関心の急激な高まりで、これが恋の即時性、早さ、一方向性を説明する。認知メタファー理論の観点から見ると恋をすることは対象に物理的に引きよせられることである。また、アンケート調査に登場した「ドキドキ」「鼓動」などの心的状態は、対象に向けて走る疾走感として表現されている。

愛は認知メタファー理論では〈愛は旅〉として二人で歩むゆっくりとした旅路として表現される。一方、雨宮(2008)では、原存在的未分化の世界で永遠と通じる。前者はゆっくりとした状態が不変に近い状態として、後者は永遠の世界が極度にゆっくりとした歩みとして捉えるならば互換的になる。双方向性の前提となる双数性、行為の同一性、相互性などを考えるとどちらも一部は満たしているが完全な双方向性は予測できなかった。

我々は、他者に惹かれ、恋に落ち、対象に近づこうとする。恋は恋愛の初期段階であり、その

恋から自己中心性を取り除き、相手の存在を全体性のもとに認めることで、相手および世界との関係を再構築する愛の状態になる。そして、J-POPの恋愛表現は、恋と愛がどのように捉えられているかを表しているだけでなく、自己の苦しく嬉しい感情状態相手へのせつない思いの表出や、相手に対して相互的で理想的な関係になることへの誓いや呼びかけという行為として読み直すことが必要なのかもしれない。

参考文献

- 雨宮徹. 2008. 「恋と愛—フランクルの「コペルニクス的転回」を手がかりとして—」『大阪河崎リハビリテーション大学紀要』第2巻.
- Deignan, A. 2005. *Metaphor and corpus linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Evans, V. Figurative language understanding in LCCM Theory. *Cognitive Linguistics*. 21-4: 601-662.
- Frankl, V. E. 1959. *Man's search for meaning: An introduction to logotherapy*. Boston: Beacon Press.
- Frankl, V. E. 1988. *The will to meaning: Foundations and applications of logotherapy*. New York: Meridian Printing.
- Grady, J. 1997. Foundations of meaning: primary metaphors and primary scenes. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Lakoff, G. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他 訳『認知意味論—言語から見た人間の心—』紀伊国屋書店 1993 年.)
- Lakoff, G. 1990. "The Invariance hypothesis: Is abstract reason based on image schemas?" *Cognitive Linguistics* 1, 39-74. (杉本孝司 訳「不変性仮説—抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか?」坂原茂 編『認知言語学の発展』ひつじ書房 2000 年.)
- Lakoff, G. 1993. "The contemporary theory of metaphor." In Ortony, A., ed. *Metaphor and thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 訳 1986 『レトリックと人生』大修館書店).
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1999. *Philosophy in the flesh*. New York: Basic Books.
- Lakoff, G. and M. Turner 1989. *More than cool reasons*. Chicago: The University of Chicago Press. (大堀俊夫 訳 1994 『詩と認知』紀伊国屋書店).
- Langacker, R. 1990. "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1-1, 5-38.
- Kövecses, Z. 2002. *Metaphor: A practical introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- 難波江和美. 2004. 「恋する J-POP—平成における恋愛ディスコース—」 冬弓舎.
- 鍋島弘治朗. 2011. 『日本語のメタファー』 くろしお出版.